

書評

白田雅之『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』

神奈川：東海大学出版会、2013年、3000円+税、294頁、ISBN978-4-486-01982-4

小谷 汪之

本書はベンガルを中心としたインドの歴史・文化研究に長年にわたって携わってこられた白田雅之氏の初めての論集である。氏にはベンガル語の詩集の翻訳書が数冊あるが、ベンガル史研究の論集としては、これが初めてで、したがって、各論文の執筆時期は1977年から2011年までの35年間にわたっている。ただし、「旧稿を全面的に書き直し」となされているから、本書の内容は氏の現在の見解を示していると考えられる。

本書の構成は以下の通りである。

第1部 オッシニクマル・ドットとスワデシ運動

第1章 マハトマ（偉大なる魂）と呼ばれた地方活動家の生涯

第2章 オッシニ・ドットの村（村の社会とスワデシ運動）

第3章 「暴力県」の聖俗列伝

1 小さな町の小さな教団（ポリシャル・ブラフモ・サマージとオッシニクマル・ドット）

2 聖家族の肖像（モノロマとモノロンジョシ）

3 聖人校長の面影（ジョゴディシュ・ムコバツダエ）

4 ムスリム指導者の誕生（スワデシ運動とフォジュル・ホック）

5 悲運の「不可触民」政治家（ジョゲンドロナト・モンドル）

6 スワデシ・ジャットラのヒーロー（ムクンド・ダーシュ）

7 詩人ジボナノンド・ダーシュとポリシャルの聖性

第2部 近代ベンガルと宗教領域

第4章 「世俗の人」の宗教改革（ラムモホン・ラエ論）

第5章 敬愛されつつ孤立したバラモンの大学者（ビッダシャゴル論）

第6章 近代ヒンドゥー教の核心を生きた聖者（ラムクリシュノ論）

第3部 タゴールと近代ベンガル（ナショナリズムと聖性のゆくえ）

第7章 ベンガル近代史におけるタゴール家の位相

第8章 タゴールの小説三篇

- 1 『ゴーラ』(近代インドの倫理性と世界性)
- 2 『家と世界』(スワデシ運動とナショナリズム批判)
- 3 『最後の詩』(近代を超えて)

本書の主題はまさに書名が表しているとおりでであるが、白田氏は「聖性」という言葉に引っかかる読者がいるかもしれないと危惧したのか、「最近では聖性などよりもスピリチュアリティが好んで用いられている」として、「聖性」とは「倫理性に貫かれたスピリチュアリティにほかならない」といいかえている。そのうえで、そのようなものとしての「聖性」が「ナショナリズムと接触したときに描く波紋を追ったのが本書なのである」と氏自ら本書の主題を提示している(239頁)。

しかし、「聖性」がナショナリズムと接触するといっても、抽象的概念としての「聖性」そのものが直接にナショナリズムに接触するわけではないから、その接触というのは「聖性」を具現している(と氏が考える)個々の人びとのナショナリズムとの接触ということにならざるをえない。したがって、本書は、具体的には、ナショナリズムとのかかわりの中で生きた近代ベンガル人「聖者」の群像という形をとることになるのである。

上記の目次中に名前が出てくる人々が、そのような意味での近代ベンガル人「聖者」なのであるが、その中には、ラムモホン・ラエ(ラム・モーハン・ローイ、1774～1833)、ラムクリシュノ(パラマハンサ・ラーマクシュナ、1836～86)、タゴール(ラビーンドラナート・タゴール、1861～1941)のようなよく知られた人々もいる。ラエとタゴールについては、すでに日本語でも専著があるし、ラムクリシュノにかんしてはヴィヴェーカーナンダの伝記などに詳しい。したがって、本書におけるこれら3人の像は、「聖性」という切り口から氏が切り出した一面像ということができるであろう。

しかし、本書の中心をなしているのはオッシニクマル・ドット(1856～1923)という、南ベンガルの地域に深く根差した人物である。オッシニ・ドットは「地主」(タルクダール)の家系に生まれたが、学生時代に、ブラフモ・サマージのケショブ・シェーン(ケーシャブ・チャンドラ・セーン、1838～84)から大きな影響を受け、ブラフモ的な倫理性を身につけた。オッシニ・ドットが活躍したのはベンガル湾の湾岸東部に位置するバコルゴンジ県(英領期のBakarganj)で、その活動の中心は1884年に設立されたBMスクールであった。この学校における倫理性の強い教育から多くの人材が育っていった。その後、

オッシニ・ドットはバコルゴンジ県の県庁所在地ボリシャル（英領期のBarisal）を拠点として、民族運動を開始したが、その頂点をなしたのが20世紀初頭のベンガル分割反対闘争、スワデシ運動であった。このスワデシ運動が「もともと組織的・効率的に展開されたのが、鉄道も通じていない片田舎のバコルゴンジ県であった」（23頁）。それは、オッシニ・ドットのような地域に密着した「ディストリクト・リーダー」の存在があったからである。

スワデシ運動というと、一般的には、B・G・ティラク、B・C・パール、L・ラージバト・ラーイといったナショナルなレベルの指導者による運動を中心として記述されることが多い。だが、運動の「現場」はバコルゴンジ県といった地域であり、そこにおける指導者たち（「ディストリクト・リーダー」）の質が運動の質を規定していた。そして、そのような地域指導者の1人としてのオッシニ・ドットの「聖性」（「倫理性に貫かれたスピリチュアリティ」）がバカルゴンジ県の運動を活性化させていた。本書で強調されていることはこういうことであろう。

本書に出てくる他の多くの「聖者」たちは、何らかの形でオッシニ・ドットあるいは彼の設立したBMスクールにかかわっていた。いいかえるならば、彼等の多くはオッシニ・ドットという光源から光被した人々だったのである。「聖家族の肖像」のモノロンジョンはオッシニ・ドットの「無二の親友」（84頁）であったし、「聖人校長」ジョゴディシュ・ムコパダエは長くBMスクールの校長を務め、学校の倫理性を守り通した。「悲運の『不可触民』政治家」、ジョゲンドロナト・モンドルと「スワデシ・ジャットラのヒーロー」、ムクンド・ダーシュはBMスクールの学生であった。ベンガルの片田舎の一つの地域がこのような一群の人びとを生み、育てたのである。これらすべての人々が作り出した精神世界を臼田氏は「ボリシャルの聖性」と呼んでいる。

以上が本書の簡単な紹介であるが、これだけでも本書に描かれた世界が臼田氏以外には到底描くことのできない、独自の世界であることが分かるであろう。「聖性」（「倫理性に貫かれたスピリチュアリティ」）がナショナリズムと接触するとき、そこに生まれる波紋を、バコルゴンジ県という一つの地域に密着して追及するという方法、それも、その地域に一定期間生活し、いわばその場の空気を吸いながら歴史的思考を発酵させていくという方法、本書はこのような方法が生み出した優れた成果といえることができる。

このように本書全体を評価したうえで、なお「不満」な点を指摘しておきたい。

その一つは第1部第2章「オッシニ・ドットの村」にかかわる問題である。一言でいって、この章はどうも分かりにくい。当時のベンガル農村がきわめて錯雑した土地所有関係（中間的権利保有を含む）の社会であったことが本章の理解を難しくしているのであろうが、それだけではないだろう。問題は氏の分析あるいは記述方法にあると思う。第一の問題は、用語（訳語）の曖昧さである。この地方では、永代ザミーナダーリー制度下の法定土地所有者をザミーナダールではなく、タルクダールと呼んでいたということであるが、タルクダールの所有地は一箇所にまとまって存在したのではなく、多数の「地所」からなっていたという。この「地所」というのは英語のestateの訳語であろう。ところが、ドット家の拠点であったホルホル村には「所有地をもつ地所（すべてタルク）は三九あった」（51頁）と書かれている。では、この「地所」と「タルク」とはどういう関係になるのか。「タルク」ではない「地所」もあったということなのか。さらに、各「タルク」には「地籍番号」がついていたということであるが、この「地籍」とは何という英語の訳語なのであろうか。要するに、「地所」、「タルク」、「地籍」という三者の関係がどうにも分からないのである。もうひとつ、各「地所」自体ひとかたまりの土地ではなく、多く村々に散在する多数の「地片」からなっていたという。この「地片」は英語のplotの訳語であろうが、普通、「地籍」という日本語はこのplotに対応する言葉なのではないだろうか。ちなみに、図1の57～62/6という数字について、何も図中に説明がないが、これらは「地片」番号なのであろうか。

第2章「オッシニ・ドットの村」を理解困難にしているもう一つの問題はタルクダールとしてのドット家の所有地の構成と、ホルホル村全体の土地所有（中間保有を含む）関係とが入り乱れて記述されていることである。タルクダールとしてのドット家の所有地構成の全体像と、ホルホル村の土地所有（保有）関係の全体像を、明確に区別して別々に提示していたならば、理解がはるかに容易になっていたであろうと思われる。

「不満」な点の第二は第3章5「悲運の『不可触民』政治家（ジョゲンドロナト・モンドル）」にかかわることである。率直にいまえば、この文章はちょっと物足りない。この文章のもとになったのは、1990年代に活動した「不可触民制研究会」の研究成果を集大成した『叢書 カースト制度と被差別民』の第3巻、内藤雅雄編『解放の思想と運動』（明石書店、1994年）に収録された「ジョゲンドロナト・モンドルと不可触民運動」という論文である。この論文は『叢書 カースト制度と被差別民』全5巻中の白眉といっても過言では

ないと思う。その後、日本南アジア学会が英文叢書全10巻をデリーのマノールから刊行することになった時、その第1巻、H. Kotani(ed.), *Caste System, Untouchability and the Depressed*, Manohar, 1999に英訳 'Pushed towards the Partition: Jogendranath Mandal and the Constrained Namasudra Movement' が収載された。この英文論集は幸いにインドでも好評であったが、中でも臼田氏のジョゲンドロナト・モンドル論は注目された。これらの邦文、英文のジョゲンドロナト・モンドル論に比べると、本書に収録された文章はかなり平板で、ジョゲンドロナト・モンドルの魅力を十分に伝えていない。だいたい、「悲運の」などという月並みな表現は臼田氏らしくないという感じがする。「聖性」に焦点を当てた本書の場合、ジョゲンドロナト・モンドルは扱いにくい対象だったということもあるのだろうが、あまり「聖性」にこだわることなく、もとになった論文「ジョゲンドロナト・モンドルと不可触民運動」全文を本書に収録すべきだったのではないかと思う。

妄言多謝。

こたに ひろゆき ●東京都立大学名誉教授